

に従って行動するようにとの指示で、皆喜んで輸送に協力した。もうすぐ日本に帰れる、何処の港から船に乗るんかと、皆故郷の想い出等を想像し乍ら、帰国話に花を咲かしていた。ソ・満国境を通過し、車内の食事は悪く、水も与えられず、寒さ厳しく、警備の歩哨は益々暴力を振うようになった。本当に日本に帰れるのか、また帰してくれるのだろうか、皆がぼつぼつ疑い始めた。貨車一輛に歩哨が二人、貨車の真ん中を中心に二か所に（有刺鉄線）を張り、下に小さな出入口を一か所作ってあり、床板に小さな穴が開けてあり、それが大小使用の穴。二人の兵隊は椅子に座り、ウォッカを飲み、パンを食べ乍ら、我々に對し悪体の限り、暴力は振うし、体の自由がきかない私は横になっただけ、もうなるように此の身を任すしかない。万一私が死んでも、日本へ連絡先もない、無国籍者として扱われる事を思うと、淋しくなるし、連行先で愈々悲惨な事件が待っていると思つて、益々寒さ身にしてみる。数日走り続け広い野原を通り、列車は或るソ連領内の駅、引込線に誘導されて停まり、全員下車。

寒い中、五列縦隊で何時間歩いたか、漸く收容所に到着（チタ）。途中、歩哨のマンドリン銃の威嚇射撃で脅かされ心身共に参った。仲間の足どりも重く、收容所に着いた。とたん、諦めの中にも生氣を取り戻した。私達が入った部屋は六十畳位の板張り部屋で、隅にビール樽、高さ八十センチ、直径五十センチ位の桶が一個、それが便所、收容人数約八十名、内女性五名、白系ロシア人四名位の人々が一緒に收容され、人間社会では考えられない生活が始まる。今から此の儘チタにいるのか、また何処の地へ送られどんな刑が待っているのか一切分からない。

チタカラカランダへ移動、昭和二十四年十月二十四日、帰還した。

原始林伐採作業は地獄図

新潟県 山田正夫

極寒シベリアの原始林は雪が張りつく氷の山でもあ

る。マンドリン自動小銃を持つソ連兵に尻をこづかれながらの山路は、防寒靴もすべりながらの現場行きである。

吐く息も防寒帽にツララをつくる。普通ならばそれでも力強く登れるだろうが、なにしろ一日黒パン二百グラム、砂糖が親指位、岩塩少々の食糧ではジツとしていても腹ペコ、まして極寒四十度近い氷の山路登り、誰も黙々として一歩一歩を登る。

現場は名も知らぬ山の中腹位、西洋鋸組二名、タポール（ナタ）組二名。鋸組はなるべくノルマを早く達成するために大きい木を選び、タポール組に斜めに倒れ易いように三角口をつけるように頼む。口が出来ると、反対側から二人で鋸を押し合う。大木が段々と斜めに姿勢を替え、やがて異様な響きをあげながら唸させつつ倒れて行く。「倒れるぞーっ」と叫んで危険を合図するのだが、声も思うようには出ない。こうしたことで倒れる大木を避けることもできずに僅か一月位の間に死亡者六名、負傷して病院行き十二名の惨状を呈したのである。「ヨッポシマーチ！」その度に

ソ連兵が怒鳴り「チッ！」と唾を飛ばし、「スコーラ、スコーラ」と死傷者を山から降ろすように命じ、自動小銃を突きつけて催促する。

その為に何人かの手が減り、作業量が落ち、ノルマ成績達成どころでなくなる。

暗くなり始めるまで伐採をやらされ、松明を掲げながら凍てつく山路を收容所へと急がされることもしばしばであった。

伐採中に、キクラゲ、苔、食べられそうな草、松の実、スーブの無くなった飯盒に木の汁をゴムを採る要領で採り、收容所で煮詰めて腹に流し込む（キクラゲはスーブとして最高の感じ）。

夜半に貨車が引込み線に入ってくると叩き起こされ、防寒具を着るとまもなく貨車への路をせきたてられる。吹雪く夜もあれば、死者の屍の臭いを知った狼の遠吠えを聞きながら月下に影を落とすときもある。

貨車へ伐採してきた材木を積み込む、貨車が満杯になるまでの作業、こうした作業も十日も経験すると要領を覚え、横積みの間に適宜、縦に材木を入れかさば

らせる。途中でどうなるかと知ったことではない。早く貨車を出して寝床。といっても丸太を組んだ上に木の皮を敷き、更に帽子や防寒具を被せ、毛布にくるまって足には布を巻きつけての二段式寝床である。今は少しでも身体を休ませて生きる力を貯えるのが一番、そしてなにがなんでも家族のところへ帰り着く、日々がそれで一杯。その寝床へ早く帰る為にお互い同士、以心伝心で作業を続ける。晴れた夜は寒さが特に厳しい。作業が終わり焚き火を囲んで暖をとってから寝床へと急ぐ。無情の道を月の光が照らす。水たまりは氷になって油断していると滑って転ぶ。栄養失調症の身体には一寸したことが怪我となり、骨折もし易くなっている。

やがて収容所が近づき、歩哨が「アジン、ドヴァー、ツリ、チテリー……」と数える。

数に弱いソ連だと毎度のことながら呆れ返る。知恵を絞って作った防寒扉を押して中に入る。ドラム缶に薪を入れ、乾燥した草に火をつけ、周りを囲んでしばし暖をとりながら、今日の無事を確かめ合う。上と下

の寝床に別れて目を閉じる。空腹と疲れ、古里を夢に見ながら、間もなく静寂の夜の帳に包まれる。

なんのために、誰のために、どうして、自問自答しながらいつものように眠りこけていく。狼の遠吠えが木の葉をゆすりシベリア風を渡って聞こえる。古里から家族の「頑張って」の子守唄を夢みながら今日も命永らえることができた。

シベリアの朝は意外なほど早い。今日は曇りで、そのうち雪が舞ってくるらしい空模様。日々が伐採の繰り返し作業、貨車積み作業、わずかばかりの黒パンと親指位の砂糖と岩塩、高粱がスプーン二杯位の朝食をとる。

スプーンはソ連製砲弾の薬キョウウが材料で、仕上げまで一か月位はかかった貴重品でもある。スプーンを入れる箸箱も自動車のスプリングを使った削り道具で造り上げたものであるが、これも貴重な日用品である。飯盒のふたに黒パンと砂糖、飯盒の中は水で沸かした高粱、味つけは岩塩である。

ゆっくりとかみしめながらの食事である。今日は何

人位が倒れるのか、みんな無事で頑張ろうね、と心に祈りながら作業仕度を丁寧に整えて行く。

あれから五十年。家族も嘘を言っていると初めのうちは言っていたが、今では信じてくれるようになった。異国の荒野に屍をさらしているであろう戦友達の冥福を祈るこの頃である。

満州―シベリア―故里への道

新潟県 関川 信二

大東亜戦争末期、満州国法人「鶴岡炭鉱株式会社」(社長日産コンツェルン総裁鮎川義介)に勤務し、その子会社へ出向、ソ満国境近くで国策に沿って懸命に頑張っていた私は、二十年八月九日国籍不明の偵察機と思われる飛行機が、会社上空を旋回しながら北方へと飛び去って行った。戦雲急を告げる情況は毎日のラジオ放送でそれとなく理解していたものの、一抹の不安感に襲われた。

案の定、翌八月十日関東軍司令部からの非常召集令状(俗に言う赤紙)が届けられた。社長からの呼び出しが来て本社へと向かった。「在滿在郷軍人総動員令が出た。君はわが社の在郷軍人分会長、家族のことは引き受けるから会社の在郷軍人全員引率して、牡丹江の軍司令部へ直行してくれ、会社は残った社員、家族全員社長が引率して新京へ引き揚げる。会社は終わりとなる。後のことは心配するな」と言われたので、その足で社宅へと向かった。懐かしく、想い出多いこの風景も見納めになるのかな、と玄関の前で暫くは付近の自然を眺めて扉を開いて中へと入った。

どうなる、と聞く妻に向かって、「小学校一年の長女を頭に四人の子供達と共に本社へ行き他の社員家族と共に新京へ行きなさい。自分は在郷軍人分会長として社の在郷軍人百人を引率し、集合場所の牡丹江の軍司令部へ行く、今度会うのは故里新発田になると思う」とその日、ありったけの馳走をし、家族水入らずの中でしばしの別れを惜しんだ。

翌朝妻子と別れを告げ、社の在郷軍人百名と共に列